

《論 説》

## 平和を拓く新発想

——新しい時代に新しい発想で、未来を展望する——

児 玉 克 哉

こんにちは。今日は平和について、新しい発想が世界を拓くということをお話ししたいと思います。私は、平和学に取り組んでいますが、平和学はいったい何なのかということを考えさせられています。何なのでしょう。実はある出版社の方から、平和学の本を作りたいということで、執筆依頼をうけました。その打ち合わせの時、平和学というのはいったい何かということで聞かれたわけですね。平和学の特色として色々なことを言いました。ですが、これは他の学問でもあるだろう、これも他の学問でもあるだろうということで色々と否定もされまして、結局何が残るんだろうかとずっと、考えているわけです。結局私はですね、平和学というのは、希望の学問、つまり希望を持つ条件をつくる学問だと思うのです。希望の学問とは、絶望した人が希望、展望を持つことになる切っ掛けを与える学問ということですね。

さあここで、一つアクティビティをやってみましょう。皆さん、起立して下さい。これはね、インドのヨガで仕入れたネタでして、ヨガの本場で習ったアクティビティなのです。じゃあそれではいいですか。ゆっくりと両手を前に出して下さい。それではですね、次に、左にゆっくりと回して下さい。ゆっくりと両手を回すのです。で、自分の限界だという所まで行って下さい。自分の限界だ、もうここまで、これ以上曲がらない、という所までです。で、どこまで曲がったかを、手と壁とのしるしで見ておいて下さい。どこらへんまでが自分の限界だったか確認しておいてください。はい、それではですね、ゆっくり戻して下さい。今度は右にいきます。右に両手をゆっくりと回してみして下さい。

自分の限界だと思うところまでです。え、それくらいしかいかないのですかという人もいますが。(笑) それではゆっくり戻して下さい。さあ、両手を下ろして下さい。今度はですね、実際には動かしません。実際にやらずにですね、目をつむってイメージの中だけで動かしてみます。イメージの中だけでやってみるのです。では目をつむって下さい。イメージをします。ゆっくりと両手を上げたイメージをします。さあ、ゆっくりと左に曲げていきます。曲げていきます。するとですね、先程見えていたしるしの所が見えてきました。さらにそこをですね、10センチ、20センチ、30センチ、40センチ、ぐぐぐっと曲げます。曲げたイメージを持ちます。はい、ゆっくりと戻します。今度は右に曲げるイメージをします。右にゆっくりと曲げていきます。ゆっくりと回していきます。先程しるしを付けた所が見えてきました。さらに10センチ、20センチ、30センチ、40センチ、ぐぐぐっと曲がりました。曲がったイメージを持ちます。さあ、ゆっくりと戻していきます。はい、目を開けて下さい。それではですね、今度はイメージにそっでもう一度やってみます。両手を出して下さい。はい、イメージにそって左に曲げていきます。イメージのように曲げていきます。はい、ゆっくりと戻して下さい。今度は、右にいきます。右にイメージのように曲げていきます、イメージしたように、ぐーっと曲げていきます。はい、下ろして下さい。はい、それでは、着席して下さい。

さあ、ここで伺います。1回目と2回目で、2回目の方がよく曲がったという人はどのくらいいますか。1回目と2回目、ほぼ同じ位だったという人はどのくらいいますか。はい、ありがとうございます。大体、私のこれまでの経験では、9割前後が1回目と2回目とで、2回目の方がよく曲がるということになります。あとの1割は、おそらくですね、こう暗示のようなものに負けるもんかという強い意志を持った人であろうと想像します。(笑) まあそういう人も社会には重要なことになるんですが。今日は8割くらいの方が2回目の方がよく曲がったという結果ですね。このアクティビティのベースはイメージトレーニングと言われるものなのです。プロのスポーツの選手も、全くこれと同じことをやっているんですね。例えばプロ野球の選手は、カーブがをイメージ

して振って打つ場面と思い浮かべます。そしてホームランした後、自分がホームにランニングして帰っているというところをイメージするわけですね。オリンピックの選手もイメージトレーニングをします。この前、冬季オリンピックがあった時にですね、スケートの選手が言っていたのは、プロのアナウンサーに実況中継を吹き込んでもらっているのです。自分が優勝したのを想定した実況中継を作ってもらっているのです。その想定実況放送では、途中でその選手が抜いてトップに立つところですね、「終盤に入ってスピードをあげて、今、抜いてトップに立った。さあそのままゴールイン！」というように吹き込んであるのです。そしてそれから表彰台に登って君が代が流れているという場面まで全部、録音してあるわけで、その選手はそのテープを繰り返し聞くのです。練習しない時に何度も聞くわけです。そしてどういうレース展開をするのかをイメージしていくのです。そのことによってより良いタイムを出していく。これは今、スポーツ界ではもう常識的にやられていることですね。

実は私達は、どのようにしたらいいのかということをもまず展望するかどうかによって全然異なる結果を得ます。今やった非常に単純なイメージトレーニングであっても、かなりの人がやると随分違うという結果です。これを社会の問題に当てはめて考えてみましょう。あるいは自分の人生の問題に当てはめてもいいかもしれません。自分の人生設計をどのようにイメージするのか、考えている場合と考えていない場合では結果が大いに影響を受けます。もちろんイメージしたものと現実とは違う場合もあります。違っても構わないのです。今の時点でどのように自分がどういうことを目指して行きたいのか、自分にとって一番やりたいこと、ベストなことといったらどういうことなのか。この大学でどういうことを勉強し、そしてどういうものを身に付けて、どういう職業に就いてどういうことを社会に対してやりたいのかということを考えている場合と、そうでなしにただ単に日々過ごして、なんとなく就職活動をして、なんとなく就職する場合とでは大きな差がでるのは当然です。イメージがある場合とない場合では随分違うわけですね。つまり、そうしたビジョンを持つのか持たないか、これが決定的に重要なポイントなのです。これは社会にとっても

も一緒です。社会どのような形にしたいのか、どのような社会が良いと思うのか、ということをイメージして、それに対して私達は何をしたらいいのかというふうに考えることは重要です。何か分からないけれども、まあボランティアでもやろうかなというのとですね、やはり同じことをやっていても随分違うんですね。自分の人生をどうイメージするのかということでも大きく違うのです。自分の将来の理想像は何なのかを考えることが必要なのです。よく言われますよね、あなたの夢は何ですかと。夢は持たなきゃいけないのですよ。あなたの夢は何ですか。一体自分は何になりたいのか、何をしたいのかだと、どういうことが自分の夢なのだろうかと。それを見るだけじゃだめなのです。それを見るだけだったら、いい夢見たねで終わるわけですね。その夢に近づけるためには、その夢を実現するためには、どういうことをする必要があるかということを描くのがビジョン作りなのです。これが設計なのですよね。人生設計でもあるし、社会設計でもあるわけです。つまり、どういう社会が平和な社会なのかということを考えていく。その理想像に近づくためには、どのようなことをする必要があるのかを考えていく。この作業をしなきゃいけないわけです。これはどういうレベルでも言えるわけですね。先程言いましたように、スポーツのレベルでも、自分の人生の問題というレベルでも。多くのほとんどの人にとって、今からをどのように設計していくのか、自分が本当にやりたいこと、活かせるものといったら何なのか、を考えることは大きな意味があります。それを実現するためには、どういうことをすれば出来るのか、をイメージしていくのです。もちろん、そうそうスケジュール通りにはいきません。上手くいかない時もあります。いろんな病気になったり、アクシデントが起きたり。でもそれは、その時点でまた考えるしかないのです。将来をイメージする能力を作っておけば色々な時に、不幸なことがあったとしても、それを良い方向に活かすためにはどうするかを考えることが出来るわけです。それを考える能力がなければ、予期しないアクシデントが起きれば、ああこれでもう自分は駄目だということになるわけですね。これは個人の問題であっても、日本という社会の問題であっても、世界という枠組みの中であっても全く同じであると考えられ

と思うのです。

話ばかりをずっとしても退屈でしょうから、もう一つアクティビティをしてみしましょう。今度は、皆さんに聞いてみましょう。もう一度起立してもらえますか。質問です。「日本は平和な国でしょうか」。次の4つの中から選んで下さい。A、日本は平和な国だ、B、日本はどちらかと言えば平和な国である、C、日本はどちらかと言えば平和な国ではない、D、日本は平和な国ではない。この4つのレベル、ご自分でどのように判断していただいても構いません。基準は自分で考えて下さい。日本は平和な国だと思う人は、前の右のコーナーに来て下さい。日本は、どちらかと言えば平和な国だという人は、前の左のコーナーです。どちらかと言えば平和な国ではないという人は、後ろの左のコーナーです。平和な国ではないというという人は、後ろの右のコーナーです。どこかの隅に動いて下さい。（参加者は部屋の四隅のいずれかに動きます）

これは、珍しい現象ですね。「どちらかという平和」を選んだ人がほとんどとなりましたね。珍しい現象ですね。普通、かなり分散するのですけども。かなり結束が強いということでしょうかね。（笑）

児玉先生「どうして『どちらかと言えば平和』のコーナーに来ましたか。」

参加者A「そうですね。まあ、全体的には平和だと思うのですけれども、色々な事件とかあるじゃないですか、それでここにきました。殺人事件とかも凶悪なのが起ってきていますよね。」

児玉先生「基本的には日本の国としては平和だけれども、色々な凶悪な社会的な事件などがあるから、『大変に平和』のコーナーに来るのはしのびないということですかね。」

参加者B「同じです、大体。」

参加者C「僕も同じです。」

児玉先生「何か、以下同文って感じがありますが。（笑）」

参加者D「同じです。」

参加者E「世界的にみると、やはりお金にも恵まれているし、豊かだと思う

のですけれど、凶悪な事件が起こるということは、まだまだ危険な要素もあるということ。」

児玉先生 「さあ、あなたはこの『どちらかといえば平和』のコーナーに来た理由は？」

参加者F 「犯罪というのは、どこの国でも、もちろんあるとは思うのですが、日本は他の国の情勢とかをあまり考えなくても過ごせる国だと思うのです。だからまあ平和ボケっていう意味でも平和なんじゃないかと。」

児玉先生 「平和であると思われるのですね。世界の中で考えてみると、当然『平和のコーナー』に来るべきだと考えられているのでしょうか。」

別のコーナーの人に聞いてみましょう。本当に『どちらかと言えば平和でない』のコーナーは一人なのですか。これは珍しいパターンですね。ここへは、どういうつもりで来られたのですか。」

参加者G 「私の平和に対するとらえ方は、安全です。日本は一見安全そうですが、具体的な数字をみると、非常に危険です。例えば交通事故の場合、死者でいうと先進国の方はかなり死者が多いのです。それと自殺者、年間3万人。そういう総合評価でみると、どちらかといえば平和ではない、危ない国だというのが私の印象です。」

それではですね、それでは少し質問を変えましょう。日本は民主的な国であるかが、次の質問です。民主的である、どちらかという民主的、どちらかという民主的でない、民主的でない、で各コーナーに分かれてもらえますか。はい、かなりの人が動きましたね。

児玉先生 「じゃあ、まず一人だけ日本は民主的だという意見があります。どうしてですか。」

参加者H 「日本は民主主義をベースの政治をやっているんですけれども、人間ですからどうしても問題は起きますよね。乱れるというのか、汚職にはしるというのか。でもそういう問題は起きてても世界的な視野から見たら、日本はまだ

民主的なんじゃないかなって思います。」

児玉先生 「世界の中では、国は200国近くあります。そういう中では4分の1のところには入るんじゃないかということですね。」

『どちらかというと民主的』のコーナーの人に聞いてみましょう。」

参加者I 「はい、日本では、大体、自分の意見は言えるんで、かなり民主的だと思います。」

児玉先生 「大体、言える。まあ、北朝鮮のように言いたいことを言えない国と比較したら随分、民主的だということですね。」

参加者I 「はい。」

児玉先生 「だから、ここだと。」

参加者J 「ほとんど、同じなのですけれども、大体、言いたいことも言えるので、かなり民主的なのではないかと思います。」

児玉先生 「でも私たちは本当に言いたいこと、言ってるのかな。それじゃ、『どちらかといえば民主的ではない』のコーナーに来た人に聞いてみましょう。どうして、ここに来たのですか。」

参加者K 「道路などをつくる時も、他の地域では必要のないところに、全国一律の道路の方針で田舎にもつくったりする。住民の方には必要のないものを造っている。国の判断でしているというところが、まだまだ住民の意識をとってないな、意識を受け入れてないなと思います。だから、ここにいます。」

児玉先生 「住民の意志が上手く取り上げられないシステムであるから、『全く民主的でない』というコーナーに行く程ではないけれども、ここら辺だろうというわけですね。では『民主的ではない』のコーナーに来た人の意見を聞いてみたいですね。何で、日本は民主的でないのですか？」

参加者L 「選挙制度がまず、全然なっていないですし、選挙区の、投票1票の格差が先進国と比べて大きすぎます。参政権が民主主義のいちばん重要なところだと思うので、それが確保されていない以上、やはり民主主義とは言えないんじゃないかなと。」

児玉先生 「日本の選挙は、あまり民主的に行われていないということです  
ね。」

参加者M 「少し、政治を見ていて最後の最後で、利権やら何やらで結局ちょっと変るので、民主主義が通ってないのかなと思ったり。政治の部分の腐敗を考えて、こっちに来ました。」

児玉先生 「次の方は教官の方ですね。では模範的解答を。(笑)」

参加者N 「政治学の教員がこういうところには、おかしいのかも知れませんが、日本の政治を見ると、政治家の人は政治家がすべて決めればいいのだというような意見を持っているようですし、逆に有権者の方も、まあほっとけば何とかなるんじゃないかというふうに、自分から政治にコミットする気がないという意味では、民主主義的ではないと思います。」

児玉先生 「まあ北朝鮮なみだというわけですか。(笑) え、そこまでは言わないのですか。さあそれでは、各自、元の席に戻って下さい。」

今、平和とは何だろうか、民主主義とは何だろうかということを考えてもらいました。私達が暮らしている社会は、どういうところに位置づけられるのだろうかということを考えてもらったのです。日本が平和かと聞くと参加者はレベルを考えて4つのコーナーに分かれるのですけれども、なぜそのコーナーを選んだかと聞いてみると違うコーナーを選んだ人もほぼ同じ様な答えをすることが多いのです。つまり何にウエイトを置くかという点での差ということになります。どのように平和の問題を考えるかということが重要になってきます。

これまでの世界というものを振り返ってみましょう。その後で、今後についてどのように考えたらいいいのかについて、お話したいと思います。まず、20世紀を振り返ってみましょう。大きく捉えて、20世紀を振り返ってみましょう。大体、20世紀には3つの大きな転換点があったと言われます。ひとつは、第一次世界大戦ですね。これはいわゆるヨーロッパ戦争の最後の段階であったと言われます。ヨーロッパは、それまでずっと戦争をし続けてきたのです。第一次世界大戦前までにはヨーロッパは世界を植民地化していました。ですから、



ヨーロッパの中でのお互いの戦争というものが、世界を巻き込んだ戦争になりました。第一次世界大戦が終わった後、何が起こったか。ナショナリズムの嵐がやってきます。ナチスドイツやムッソリーニとかが台頭してきました。日本でも軍国主義が台頭して、非常に国粹主義的なナショナリズム的な動きが出てきます。民族主義的な時代となります。それから、第二次世界大戦が時代の転換期となります。さあ、第二次世界大戦が終わって、どういう時代が訪れましたか。考えてみてください。

まず米ソ冷戦時代といえるでしょう。米ソ冷戦の時代であり、なおかつ核時代と言ってもいいかもしれません。アメリカとソ連を頂点にして、東と西が睨み合うというか、その中で戦争も起きてくるという時代です。まあ、教官の多くは、まさに米ソ冷戦時代の中にどっぷりつかってきたわけで、まったくこの冷戦構造が崩れ去るなんて思ってもみなかったのですね。大体、人間の常識が意識されるのにそんなに長くかかるもんじゃないのです。大体、30年、40年くらい経つと基本的に社会というのはそれで固定されたと思ってしまうというのが、私達なのですね。考えてみてください。この中で、ご自分の曾お祖父さんが曾お祖母さんかの名前を知っている人はどのくらいいますか。え、ゼロですか、普通これくらいの人数の人がいたら、2、3人くらい知っている人がいるのですけどもね。ゼロですか。曾お祖父さん、曾お祖母さんが、どういう人かというのはまったく分からないですね。ということは、あなた方の最も古い記憶としてあるのは、お祖父さん、お祖母さんのところなのです。お祖父さんお祖母さんがまだ生きておられる方も多いかもしれないですね。つまり自分の直接的な記憶として遡れるのは30年、40年くらいのところなのです。お祖父さんやお祖母さんの記憶を聞くということをいれても、60年か70年という程度です。それくらいで大体常識というのは決まっているんです。どんなに頑張っても70年。100年前に遡ると、自分達の直接の記憶ではコントロールできない状況になるわけです。自分の感覚としては分からないのです。私は、曾お祖父さんの名前は知っていますよ。児玉忠八さんという名前ですね、エピソードを一つ知っています、何度も聞きましたから。非常に頑固な人でして、食事が出ますと、

御飯とか汁物とかを置くべき決まった場所がありましてね、その場所が違って  
いるというだけで、ばーっとちゃぶ台をひっくり返すということは聞きました。  
今は誰もそんなことをしません。ばーっとやったら、後で掃除するのは自分達  
ですからね、しませんけれども。(笑) つまり私達の常識の多くは、30年、40  
年くらいの時間の長さで形成されていくんですね。これが常識だと、これが天  
下の法則だというふうに考える。冷戦というのは50年近くの長い期間あったわ  
けです。ですから私達は冷戦構造がなくなることはないと思っていたのです。  
それがなくなったのです。

第3の変革期というまでもなく、冷戦の終焉です。冷戦が終わるという時で  
す。これは1990年前後といわれます。あなた方の多くも冷戦の終わりは記憶に  
あると思います。さあ、ここで問題です。第一次世界大戦が終わって、ナショ  
ナリズム、ファシズムの時代だといいました。第二次世界大戦が終わって、米  
ソ冷戦の時代だと、核時代だといいました。さあ、今の時代は何の時代でしょ  
うか。

児玉先生 「何の時代でしょう。」

参加者O 「アメリカの、何ていったらいいのか。」

児玉先生 「一極時代。」

参加者O 「はい。」

児玉先生 「アメリカの支配する一極時代という答えでした。

では他の人、何の時代でしょう。はい、どうぞ。」

参加者P 「戦争のない時代」

児玉先生 「戦争を知らない時ということですか。日本では微妙な点がありま  
すが、いえるかもしれないですね。日本そのものが戦場になったということ  
はない。まあ、世界の中では戦争はいっぱいありますよね。他にありませんか。  
何でもいいよ、今の時代は何の時代だろう。」

参加者Q 「宗教の時代。」

児玉先生 「宗教の時代、うん、宗教台頭の時代。これもいえそうな感じです

ね。

他に。」

参加者 R 「テロの時代だと思います。」

児玉先生 「テロの時代。これもいいですね。」

最近は一アメリカ極支配の時代という捉え方も多いですが、当分の間ずっと、ポスト冷戦時代と言っていました。さすがに21世紀に入ってからポスト冷戦時代とは言わなくなって、21世紀新時代とか言うんですね。でも何がなんやら分からない。ポスト冷戦時代というのは何なのでしょうね。「ポスト」という言い方を少し考えてみましょう。ポスト小泉というのは正しいのです。つまり、小泉さんの後が誰になるか分からない時には、ポストというのをを使うのです。次の時代が何になるか分からない時。平成の次の時代は何の時代になるか分からないから、ポスト平成時代としか言いようがないですね。ポストというのをを使う時には、何の時代か分からない時にポストなんとか時代と言うのです。これが、相当に長い時間使われたのですよ、10年くらい。ポスト冷戦時代における日米関係とかいってね。それがやっぱり21世紀になると出来ないから、21世紀における日米関係とかね、21世紀における国連のあり方とか使われるようになった。つまり、いまだに今の時代の定義は明確でない。どういう時代になろうとしているのか、あるいはどういう時代になったらいいのかということが、いまだにはっきりしないというのが、今の時代なのです。いちばん最初にアクティビティでビジョンのイメージの大切さを実感してもらいました。どういう時代になるのか、したいのか、これが分からない時代なのです。いまだに私達が時代の方向性を作っていないという時代なのです。だから私達は、つくらないといけないのです。ひとつには、どういう時代になるのだろうということがあります。しかし、どういう時代にすべきなのだろうかということはまた違うものですね。考えることがあるでしょうか、どういう時代にしたらいいのだろうか、どういう社会にしたらいいのだろうか。つまり、冷戦が終わって、非常に安易に世界は平和になると思う人もいました。しかし、よくよく見てみ

るとそうではない。戦争がたくさん起きてくる。じゃあ、どういう時代にすべきなのだろうかということをつくっていかないといけないと思うのですね。

核時代という特徴は変っていません。先程、テロの時代というのもありました。核時代、テロの時代、紛争の時代と言ってもいいのですけれども。私は、広島に生まれて広島に育っています。そういう意味でも、核兵器の問題というのは非常に大きなテーマとして、私自身も考えてきたわけです。私個人の話を少ししましょう。私自身はですね、基本的にこうした平和の問題というのは、学生の時に、日米学生会議という活動に参加したりするなかで関心を持つようになりました。アメリカ軍の撮影した広島・長崎の被爆のフィルムを買い戻して、新たなドキュメンタリーフィルムを作ろうという10フィート運動という平和運動に参加したりしていくわけです。私は、もっと幼い時の話をしますと、ずっと知恵遅れの子だったのです。本当に小学校の低学年くらいまでね、写真をみると腰のまわりが太いのです。今も太いですが、これはお腹が太くなっただけでね。(笑)昔は痩せていたんですけども太いのです。おむつをしているのですね。本当に小学校でですよ。小学校で絵を書かせるとですね、黒の一角でなぐりがきがしてあるのです。これが私の絵です。何でこういう話をするかと言うとですね、私はスウェーデンで留学しているときに長男を授かります。長男は元気な子であったのですけれども、その子が生まれてはじめて、私の母は、原爆手帳を申請しました。つまり、おそらく彼女は、私が出来の悪かったというのは、おそらく原爆との関係、つまり自分が被爆したということの因果関係というものを疑っていたのではないかと思います。ですが、それまでね、一言も被爆をしたと聞いたことないのですよ。私はずっとそれまでも平和の活動をやり、被爆者の調査をし、被爆者の人生史の本を出し、ということをやっているわけですよ。それにもかかわらず母が被爆しているなんていうのは、私も思いもよらなかったですね。嘘だろうと思いました。一言も聞いたことなかったのですよ。私の子供が元気で生まれた時に、初めて申請したのです。おそらく私自身がずっと知恵遅れだったということもあって、随分とそういう因果関係、つまり、私の子供がもし何らかの障害があった時のことを考えて、原爆

手帳を申請せずに、つまりそういうところで心配させないということだったんだらうと思っているのです。ごく最近、2週間前に初めて手記を書いたということで、母が送ってくれました。読んでみると、やっぱりね、6回くらい入院しているのですよ。被爆した直後にも急性肝炎で2ヶ月くらい入院してますし、私の弟を産んだ時にも6ヶ月くらい入院をしています。まあ、普通は元気なんでね、私もそんなに体が悪いとは思っていなかったですけども、随分、入院を繰り返しているわけです。何を原爆がもたらしたか、考えてみましょう。基本的には、やはり未来への希望を踏みにじったと思うわけです。つまり、私の子供がどうであるかということはずっと不安にさせた。ずっと、子供ができて生まれるまで、将来に向けての不安というものを相当にしなきゃならない。自分自身の結婚の問題でもあるし、これからの子孫、子供、孫に対しても自信が持てないという恐怖感を与えたのです。つまり、核時代というのは、人間の希望を奪うということ、核というのは、核兵器というのは人間の希望を奪うということだと思います。

テロの時代という人がいました。実に、私はこれも同じことが言えるのだろうと思うのです。テロがいつ起こるか分からない。自分達の築いたものを一瞬のうちに壊すかもしれない。私達は、常に未来へ向かって色々なものを作っていく、そして色々なものを遺していくという感覚というものがあるわけです。そして、それを目指していくということが、いちばん嬉しいことなのですよ。やりたいということなのです。それが出来ない可能性が出てくるのが、核時代であり、テロの時代であると思うのです。これを打ち破って、そして、希望を持つ、展望を持つ。これが私達がやらなければならない作業だろうと思うのです。そのための学問が、平和学だと思うのです。と考える中で、希望を持つために、新しい時代に合った、新しい発想というものを私達は見つけなきゃならないのです。これまでは、日本は高度経済成長をしてきた。ですから、核時代でありながら、またテロも起こりながらも、それについて、あまり考えないということによって一応の希望を持つということができたわけです。とにかく考えない。ですから、戦争や紛争によって被害を受けた人の希望というものは

大いに失われても、そして、私たちにとっても可能性として希望を断たれると  
いうことがあるにせよ、そのことについて考えないということによって、とに  
かく経済成長をしていくという中で、生活が成り立ってきたわけです。しかし  
こうした状況も変わってきています。どんどんと世界で紛争が起こってくる、テ  
ロが起こってくる、となると考えざるをえない。この時に私達はこの閉塞した  
時代の中で、どのようにして希望を見つけることができるのか。どのように閉  
塞した枠組みの中から、光を見つけることができるのかということを考えてい  
かなきゃならないわけです。これは非常に重要なことだと思っているのですね。  
人間は、ただ単に生きればよいというものではありません。私はよく人権に関  
した講演でも、よくする話なのですが、例えば、身体障害者になったと  
しましょう。よく日本の福祉施設なども山の中腹の人里離れた所に造られてい  
ます。そうした新しい施設では、栄養価も栄養バランスも考えられた食事が出  
され、暖かい部屋で暮らせるかもしれません。しかし、そのときには、あなた  
は社会に関与するのは難しい状況に置かれるのです。もう本当に、部屋の中で  
生きるだけですといわんばかりの施設に閉じ込められるのです。これで、本  
当にその人の人権というのは確保されるのかと、その人は嬉しいのだろうか  
と考えざるを得ません。会社の中でそういうことが起きたときには、窓際族と  
言われるわけです。窓際族とみなされた人には、会社は給料は出す、けれども  
あなたは一切会社のことはもうやらなくていい、やってはいけませんというこ  
とになります。その人が会社に対して持つ価値を認めないのです。それは非常  
に辛いことなのですね。だから、辛くて会社を辞めるわけです。まさに私達は、  
今すぐ日本の社会の中で飢えて死ぬということはないかもしれませんが。食べる  
物もある、ある程度のものは着ている、これはおそらくある当分の間、保てる  
だろうと思うわけですね。けれども、そこで私達は本当に今の核時代、あるい  
は冷戦が終わってからのテロの時代とか、紛争の時代とかいうものを打ち破れ  
るような希望、展望を持っているのかといわれると心もとない。それに向かっ  
て何かしようとしているのか。もしできないのであれば、生きていたって窓際  
族にさせられるのと一緒に話なのです。つまり、ここで私達はこの未来をな

くすような枠組みを打ち破るような希望というものをつくっていかなきゃならないだろうと思うのです。それが、「本当に生きる」ということなのではないでしょうか。

ここで、幾つかの新しい発想を紹介したいと思います。まず細かいところから少しやっていきます。実際には小さな問題ではなく、大変に重要な問題なのですけど。私は、国の防衛のあり方として、非攻撃的防衛ということを提唱しているわけです。勉強したいという人がいたらね、宣伝もしておきましょう。

『新発想の防衛論』という本を大学教育出版から出しています。興味のある人は参考にしてください。非攻撃的防衛、これを例えて説明しましょう。例えばあなたの隣人がピストルを持っているとしましょう。ピストルを持っている人に対して、防衛するのにどうしたらいいか。まあ、ひとつはあなたもピストルを持つということですね。相手がピストルを持っているのだから、ピストルを持って防衛するということです。しかしそうすると、こちらもピストルを持っていれば向こうもですね、もっと速く撃とうという気になります。こちらも撃とうという気になります。あるいは、こちらがピストルを持っていればですよ、今度は相手はライフルを持とうとします。そうすると、こっちもライフルを持たなきゃいけません。益々危なくなってくる、という関係になります。アメリカでは、自己防衛で拳銃の所持というものが認められています。アメリカへ行った時に読んだ新聞記事でこういうニュースがありました。実際に調べてみたのです。強盗に入られた時に、ピストルを持っている時と、持っていない時とどちらが危ないか。統計をとると、ピストルを持っていた方が死亡率が高いのです。これは当然ですよ。強盗に入って相手がピストルを持っていると思ったらね、撃ちますよ。持っていなければ逃げるだけですから、それで終わりになるのですけれども。まあそういう関係といってもいいかもしれません。ピストルを持っているという時には、非武装中立の発想は、相手がピストルを持っていっても無防備で握手しようよ、というわけです。握手しようというのに相手が撃つことはない、考えるのがいわゆる非武装中立的な発想ですね。握手すればなんとかなるよと。相手が撃つ可能性はまずないが、万一、撃たれたとし

たら、それはそれで仕方ないじゃないかというのがひとつの発想ですよ。これは考え方としては素晴らしいものといえるでしょう。しかし、一国の外交姿勢として国民の理解と支持を得るには現状では難しいでしょう。相手がピストルを持っているという時には、まずは握手の前に、防弾チョッキを着ようというのが非攻撃的防衛の発想です。いい防弾チョッキを付け、そして、その上で握手する。つまり、基本的に防衛を、攻撃的なものをできる限り少なくして、純粋に防衛的なものにします。それを多くの国がやればやるほどですね、世界は平和になってくる。その世界に平和の文化と政治が実現した時点になって、全ての軍備そのものを、なくすという方向が考えられるわけです。これが非攻撃的防衛の目指す発想です。こうした発想のもとで、様々な地域の防衛の枠組み、安全保障の枠組みを考え直していくというのが、私が提案している考え方なのです。

日本は戦争が終わってから、平和になろうということで、平和憲法をつくります。しかし、その間に朝鮮戦争があり、ベトナム戦争があるなかで、日本は日米安保の同盟の枠組みに完全に位置付けられます。そういう中では、片方で非常に平和的な、平和憲法のいう絶対的に平和主義があり、片方では、日米安保のアメリカの非常に攻撃的な軍事戦略に同調していく方向が対立するわけです。右と左との勢力の中で、「落としどころ」をその時その時の政治勢力によって決めていくのが戦後の外交政策でした。まあここら辺だったらいいんじゃないか、GNPの1パーセント以内くらいであつたら日本も軍備を持っていんじゃないか、1パーセント程度ならいいんじゃないかという形で決めていく、のが日本の防衛政策のあり方だったのです。しかしそこでは、新しい発想でどのように日本の防衛を本当に構築していくのかということができなかった。私は革新の側も、批判はされてもしかたないと思っているのです。革新といわれる、あるいは平和勢力といわれる側からもそういう発想は出されず、とにかく軍事費があつたら、それを少しずつ抑えようという発想に終始します。1パーセントの軍事支出を0.9パーセントになんとかできないかという発想なのですね。そうではなしにもっと違う発想で、新しい防衛のあり方というものを考え



ていく。つまり、右か左かというのではなく、前へという発想ですね。右か左かというのではなく、前へ出るという発想のもとで考える必要があります。今、アジアの平和について考えてみると、中国という大国があります、日本という大国があります。この両方の大国そのものが、周りの国からはあまり信頼もされていません。少なくとも軍事という面で、リーダーシップをとれるような状態じゃない、という枠組みの中で、アジアの安全保障を考えるのは非常に難しい話なのです。この難しい、ほとんど出来そうもないような閉塞した状況に、新たな光を持つとするなら、もっと違った発想を持って日本の防衛をつくり、そしてそのもとから、違った安全保障の枠組みを、つくっていくという作業をしなければならないだろうと思うのです。この作業ができるのかどうか。これまでの考え方に固守するのではなくて、もっと違った発想でやっていかなければならない。それが上手くいかないから、上手く出してこなかったから、色々問題が起こってくるわけです。今、有事法制の問題があります。興味のある人も学生もある程度いると思いますけれども、有事法制の制定の方向で国は動いています。私自身の考え方を言えば、有事法制をつくること自体が反対ではありません。というのはどういうことかと言うと、有事が起こるような緊張した時に法律がなければ、日本は無法状態になります。無法状態になるとなれば、超法規的というような状態になりますから、軍隊が何でも出来るような状態になってきます。これは、非常に危険な状態だと思っているのです。ですから、平和な時に軍隊が何が出来るのか、何をしてはいかないのかということをきちんと決めておくことは重要だと思うのです。しかし、今ある、今出ている有事法制の案というのは、非常に問題が多いわけです。つまり、日本は、攻撃されてなくても、有事と宣言できるわけです。一言でいえばですね、眼をつけたという判断するなら、「防衛のために」殴ってもいいよということはですね。相手も同様に考えるでしょうから、相手が私が眼をつけたと思えば殴る権利を持つことになります。非常に危険な状態におちいるわけです。こういう意味からも、今ある有事法制はとんでもないやり方だと思うのです。しかし、それが通るかもしれないわけです。ここで問題なのはですね、ただ単に有事法制が反対

だというだけではなくて、どういう有事法制なら必要なのか、どういう有事法制なら平和のためにむしろ寄与するものなのかということも考えなければならぬことだと思うのです。そうした新たな発想を出していくことをしなくてはいけない。もうひとつはですね、国連主義。つまり力ではなくて、理解と協力によって、国際的な枠組みの中で問題を解決する仕組みを本格的につくっていくことの必要性です。国連も基本的に期待するほど機能していません。機能させるためには何をすればよいのか、どのようにすればよいのか。機能していないということを批判するのは、割と簡単な話です。日本人は、かなり国連に対しては期待しています。良いイメージがあります。日本政府がどれだけ国連主義を大切にしているかは別にしてですね、日本人は国連に良いイメージがあります。大体、世界の中で良いイメージを持っている国というのは、日本と北欧の諸国くらいの話であって、あとはシニカルに国連を見ている傾向があります。アメリカなんて国連、UNを、ユナイテッドナンセンス (United Nonsense) と呼ぶくらいで、ほとんど軽視してきているわけですね。しかし、だからどうにも解決しないのだと言ったら、その時点で私達の理想というものを捨ててしまっているわけです。どのようにしたら、国連が本当に力があるものになるのか。例えば、日本がもし国連軍というものが力で必要ということになってくるならば、自衛隊を国連に差し出したらいいいのではという話が出てくる。実際に1960年代に坂本義和先生がそういう論文を書いて、みんなが啞然としたということがあります。一年くらい前に、自由党の小沢さんが、そんなことをまた言っていたんですね。またびっくりもしましたけれども。新しい発想で、国連を実際に活かしていくにはどうしたらいいのかということが、私たちが考えるべきことなのです。

チキンゲームというゲームがあります。これはどういうゲームかというと、1960年代にカリフォルニアで流行ったゲームです。カリフォルニアですから長い直線のハイウェイがある。そこでですね、車と車がぶつかり合うというゲームなのです。猛速度で走ってきます。そうすると怖いです。どちらかがふっと道の端に逃げていきます。早く逃げた方がチキン、つまり弱虫と呼ばれるゲー

ムなのです。これ、若者の中で流行ったといわれますけれども、どちらも「勇敢」でどっちも逃げなかったら、ぶつかっちゃうのですね。どっちかが逃げるのを前提にしており、逃げた方が負け。危険なゲームです。実にこれに近いようなことが今、行われているのです。しかもぶつかる時にですね、ダンプカーと自転車のような時というのもあるわけです。アメリカがイラクに対して行っていることはこの例えで考えることができるのではないのでしょうか。日本が北朝鮮に行っていることもその通りだと思いますね。正しい、正しくないというのは、価値判断ですから別の次元の問題です。イラクが力を持っていたらどうだろうか、北朝鮮が力を持っていたらどうだろうか、これは状況を大きく変えます。つまりぶち当たったとしても、日本と北朝鮮との話であれば、日本が勝つだろうと。まず勝つでしょう。現在、非常にタカ派的な雰囲気が強くなっています。つまり、すべて強固にやっていけばいいのだ、強く交渉するというの  
 がいいのだという雰囲気が出てきました。アメリカがイラクに対して、フセインに対してやっているのとほぼ同じような精神構造が生まれているのですね。ぶつかるなら、ぶつかったらいい。向こうがくじけるだけだ、という発想で、どんどん攻めていく。同じことを中国にやれるかといえば、中国にはやれない。これはここから先は道理の話じゃなく、力の話なのです。基本的に今の時代であれば力を持って、軍事力を持って、自分達が正義だとして国際政治を動かすのが、良いことなんだという風潮があります。これは私、非常に大きな問題だと思います。つまり、力のない国はどうなのか。私は北朝鮮に条理があると言っているわけではないのですけれども、たとえ不条理なときがあっても、条理よりも力の論理の中で動こうとしているわけです。つまり、国連の中で、何をやったらいけないという議論がされ、完全に公正ということはありえないとしてもですね、ある程度、公正な枠があり、判断があって制裁を加えるというシステムが必要なのです。力のあるものがその国の正義感や、その国の発想・イデオロギーによって、力のない国を吹き飛ばしていくことができる、これが許されるというのが今のシステムなのです。これでいいのかという問題を私達は考えないといけないのですね。より公正なシステムとは、いったい何なのか。

最後に、お話ししておきたいのは、NGOの問題です。よく、現代はNGOの時代だと言われます。アフガニスタン戦争がありました。もう本当にずっと前の過去のような気になりますけれども、ほんの1年前に起きた戦争です。その時に、文明の衝突、つまり、キリスト教文明とイスラム文明の衝突だという分析がありました。私はですね、その時に、これは破壊の文明に対する破壊の文明の衝突だと言いました。ユーゴスラビアの紛争をヒントにして、破壊の文明と破壊の文明の戦いだと考えるようになったのです。これはあなた方も覚えていると思いますけれども、ユーゴスラビアで紛争がありました。NATOが、大規模な空爆をセルビアにしました。紛争の後を追っている研究者がいます。スウェーデンのヤン・エーベリー博士ですが、彼から色々話を聞いたときに、これは破壊の文明だということを言ったんですね。つまり、色々な正義感があって、そしてその様々なイデオロギーのもとに空爆した。これはまあ、正しいかどうかは別にしても、ひとつの考え方としては、まあ、あり得るわけですね。攻撃するときに非常に莫大な予算を使っています、NATOも。すごい予算を使って、すごい爆弾を使ってボンボンと空爆をしました。しかし今、旧ユーゴスラビアが復興しようという時に、復興するための資金はほとんど出てこないのです、どこからも。破壊だけしておいて復興は自分達だけでやれよということなのでしょう。つまり、ユーゴスラビア空爆は、正義の名を借りて、単に破壊しただけじゃないのかと考えられるのです。もし、その時のイデオロギーや正義感というものが、そのままあるのであれば、そこで復興するためにどのようにすべきなのか、というところまで入ってくるはずなのですから、最も人道的な復興には皆及び腰になるのです。爆撃するときだけ、壊すときだけ、わぁっと予算使って、一気に破壊したのです。今、非常に多くの人がユーゴスラビアでも苦しんでいる。苦しんでいても、それに対しては何の援助もない。どのように復興していいか分からない、という状況がある。これを彼は、破壊の文明の仕業と言ったのですが、アフガニスタン戦争もまさにそれに近いものだった。テロによる破壊の文明、対、戦争という破壊の文明の戦争といえるのではないのでしょうか。アフガニスタン戦争の時に、ひとつニュースで見て、お

もしろいと思ったのは、自衛隊の派遣と NGO の派遣に関しての態度です。日本  
 は自衛隊を派遣する、派遣しないということでもめました。結局は、日本は  
 自衛隊を遣したわけですから、スウェーデンは派遣しませんでした。代わ  
 りにですね、スウェーデンは NGO による不発弾の処理を国の援助もあってや  
 りました。まさにそうしたことをすることが建設の文明というか、創造の文明  
 といえるのではないかと思います。NGO、世界の民衆をどのように活かし  
 ていくのか。国連改革に関しても、1980年代の半ばくらいから、随分色んな案  
 が出ました。国連というのは国の集まりです。United Nations です。国の集  
 合体なのですね。人権の問題を考えてみても国の集合体である国連の限界がよ  
 く分かります。今世界の200ヶ国近い国の中で、どれくらいの国が民主的  
 といえるかどうか。例えば、政治的に政府と違うイデオロギーを持っていて投  
 獄される、殺される、ということが平気で行われる国を民主的でないとしたら  
 ですね、かなりの国がこの非民主的なカテゴリーに入るわけです。つまり、非  
 民主的で、非人道的なことを平気でやっている国がたくさんメンバーに入っ  
 ているのが、United Nations なのです。こう考えるならば、国連のできるこ  
 とは、随分と限定されたものになると考えていいと思うのです。むしろ、世界  
 市民とか NGO とかいうものを基盤においた、世界的な枠組みを作る必要があ  
 るのです。1980年代の後半くらいからは、第二国連とか、世界市民国連とかい  
 う言い方で国連の改革に関した様々な提案が出ています。私もこの分野を研究  
 して、提案をしたことがあります。私達はもっともっと NGO の力、つまり民  
 衆の力を活かせるシステムを作らなきゃいけない。私達は核時代とか紛争の時  
 代とかいう現代世界の中で、閉塞から抜け出すために色んなことが出来るわけ  
 です。出来るけれどもそれをやっていない。やらなければ暗闇の中から何抜け  
 出すことが出来ないのです。色々と実践をすれば、私は必ず、新しい道が  
 できると思っています。そのひとつのヒントとはやはり NGO をベースにした  
 国連改革です。NGO に関して言えば、ずいぶんと状況が変わりました。まず  
 ひとつには、発想が違ふようになりました。環境問題を例にとりましょう。環  
 境問題というのは、いわゆる敵が個々の敵ではないわけです。地球環境を破壊

しようとするのが敵です。つまり世界の人類は、ある意味で共通の敵を持っていることになります。核兵器も、人類共通の敵のひとつになります。つまり、人類が共通の敵を持ち、そしてひとつの発想をもってまとめられる、あるいは連帯する可能性が出現したのです。この流れを助けるのは情報革命です。今、色々な所で情報革命が起こってきて、世界の人々はどんどんと交流出来るようになってきました。あなた方もおそらく何人かは、世界の人と様々な交流していると思います。国際交流が非常に安価に出来るようになった。もっともっとしなければならないのです。もっと意図的に、私たちはそうしたネットワークをどんどん作っていかなくてはならないのです。私も国際的なネットワークの中にいるので、非常にたくさんのメールが世界の多くの国から飛び込んできます。こういう国際的な交流の枠組みができる時代がやってきたということなのです。考えてみてください。わずか100年ちょっと前が、曾お祖父さん、曾お祖母さんの時代です。私達は感覚がないだけであって、わずか100年ちょっと前の時代、つまり江戸時代には、日本の中が非常にたくさんの藩に分かれていて、その藩を越えるという時には手形を見せて、関を越していかなければならなかったのです。その当時の人のアイデンティティーは、その地域の藩の中の村に限定されて、どこどこの村の何々というしかなかったのです。日本人であるという感覚は、まずなかった。ちょっと隣の村へ行くのにも手形が要するという状態だったのです。それが今では、僅か100年ちょっとの間に、そんな村に結び付けられた発想は全くといっていいほどなくなった。ここにいる人も、亀岡の市民だけじゃなくて色々な所から来ているに違いない。全国から来ているに違いないわけですね。自分たちを考える時には「日本人」であること、まず「若者」であることを意識するのでしょうか。サッカーのワールドカップをみると日本の応援をするという感覚が出てきたんですね。この変化は、僅か100年の間になされたものです。今、京都から亀岡へ来るのに、手形を見せることは全くないわけですね。こうした拓けた時代に、僅か100年ちょっとの間になったのです。今どんどん世界が変わってくるわけです。これまで私達の頭は国家に縛り付けられていました。日本の国の国益はどうだと。国際政治に目をや

ると国益はどうだ、北朝鮮との関係では国益はどうなんだ、という意見がどんどん出てきます。しかし、国益を離れる時代は、かなり早いテンポでやってきています。これは NGO という形でもやってきます。NGO に入っていれば、その NGO、例えば環境保護の NGO の団体員であるというアイデンティティーの方が、日本国民であるというアイデンティティーを超してくる時代が、必ずやってくるわけです。この変化は急速にやってきます。つまり、100年ちょっと前には、自分達のアイデンティティーは小さな村に押し込められていた。これを解放する、解き放つ時代が、100年の間に完成してきているのです。そしてそうなれば、さらに次のレベル、国、国益という中に閉じ込められてきた私達のアイデンティティーが、変わっていく時代が非常に僅かの間にやってくる。この可能性はますます高まってきています。情報革命という意味でも、全く違う次元のレベルになっています。この違う次元のレベルを使うことが出来るのか、出来ないのか。まさに私達にかかっている、と思っています。そうした新しい発想で、新しい時代をつくっていく、新しい地球をつくっていく。新しい時代のビジョンを考えて、そのための努力を一緒にやっていきたいと思うのです。